
灰色空模様

寧祈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

灰色空模様

【Nコード】

N7130A

【作者名】

寧祈

【あらすじ】

サナとヒロ。もうその組み合わせで呼ばないで。だって、アタシ達もう別れたんだから。

プロローグ（前書き）

恋愛小説初挑戦です。乙女の恋心って難しいですね…。

プロローグ

はつきり別れを告げられた訳じゃない。

なのに君は 『付き合ってなんかない』 そう言った。

そう言われたあの日から、楽しかった中学校生活が灰色に変わってしまった。悲しんでる？まさか…。あの人に呆れてるだけ。アタシを理由も無しにいきなりフツたあの人に。

友達はまだアタシとアイツが付き合ってると思ってると思ってるみたい。前までは照れ隠しで『そんな事ないっ』って言ってたけど、今じゃ真実を伝えるために『そんな事ない』って言ってる。

『サナとヒロ、付き合ってるんでしょ？』

サナとヒロ。うん、昔はよく合わせて呼ばれてた。仲がいいからって。でも、もうサナとヒロじゃない。サナはただのサナ、ヒロはただのヒロ。2人はもう別々になってしまったから。もう合わせて呼んだって意味がない…。

『付き合ってなんか、ない』

震える唇でそう返す。何だろう？引きずっている訳でもないのに… 声が震えてしまうのは何だろう？

『あつ、ゴメン』

どうして謝るの？アタシそんなに嫌な顔してた？それとも、悲しそうな顔でもしてた？せいせいしてるくらいなのに…

あんなの恋の内に入らない。だってあんなに短かった。3ヶ月だっけ？4ヶ月だっけ？まあ、いずれにせよ短い期間。アタシ達の付き合いなんてそんなもの。だからもうキレイさっぱり忘れた。覚えとくような事じゃない。だってこれからまたイイ人を見つける。

中学校入って初めての席で、となりに座った人。口は悪いけど力ツコイイ。その人を好きになったっていいんだから。

中学校入ってから優しくしてくれた人。紳士的でイイ人だった。あの人を好きになったっていいんだから。

中学校入学前から知っていた、懐かしい顔ぶれの人。可愛くて優しいの。この人を好きになったっていいんだから。

でも絶対絶対、ヒロだけには恋しない。そう決めていた。絶対絶対絶対、ヒロだけには恋しない。

プロローグ（後書き）

読んでくださいますと本当に有り難うございます。当の作者は本題に突入する前、プロローグだけでへバリそうです。誰か、こんな僕にアドバイスをください…。

1・あいつは恋愛対象外

「おはよう」

アタシが教室に入っていくと、もう数名のクラスメイトが学校に来ていた。アタシと仲の良い、アユミもいる。アユミはアタシと違って、今恋をしているようだ。アタシのとなりの席の、ユウトって男子に。アユミがよくアタシの席に来るのは、実はユウトと話すためだという事を、アタシは知っている。

「おはよう、アユミ」

「あつ、サナ。おはよう」

アユミ、朝から何をやっているかと思えば…例のユウトとじゃれあつて。2人はもう付き合つてると同じくらい仲が良い。

「2人とも、仲良…」

言いかけたけど、アユミににらまれてやめた。照れ隠しが下手なんだから。

「お、サナ。おはよ」

いきなり後ろから声をかけられた。

アタシの嫌いな…大嫌いな男がそこにいた。

「おはよう…ヒロ」

アタシが顔を引きつらせてるのにも気付かず、ヒロは笑っている。本当憎たらしい。ヒロはスポーツ少年。だから恋にもさっぱりしているのだろう。そういうアタシも運動部に入っではいるけど…アタシの方はあまりさっぱりした性格ではないらしい。

ヒロが机から本を取り出し、広げて読み始める。ヒロには、そういう姿がとことん似合わない。でもなんとなく気になって、アタシは声をかけてしまう。

「その本、何？」

「ん？コレ？野球」

やっぱり野球なんだな。ヒロのやってるスポーツは野球。もちろん昔ながらの熱血部活、野球部に所属。さっきのスポーツ少年、というのも、正しく言えば野球少年だ。野球なんて何が楽しいんだかアタシには分からないが、ヒロは暇さえあれば素振りをしている。本当分らない。なんでこんな人を好きになつたのか…。今じゃ何にも思つてないけど。

「野球つて、そんな楽しい？」

「そりゃまあー、テニスとかバスケとかサッカーとかも楽しいけどさ。やっぱり野球が1番かな。それに、野球つて漢字じゃん」

「漢字？何の関係があつての漢字なの？」

「何かこう、母国的な…何かが」

…本当に分からない。ヒロの思考回路が分からない。

「まっ、やってりゃ楽しさも分かるよ。サナ、野球やる？俺が球投げてやるっか」

「遠慮しとく。アタシは陸上で充分だし」

「ちっ、そこはノレよな」

なんだかんだ言つて、ヒロと話してるのは楽しい。こういう所で好きになつたんだっけ？もう2度と好きにはならないけど。

じつとヒロを見つめていると、ヒロが露骨に変な顔（敵意むき出し）をした。

「何だよ、気持ち悪い」

「るっさい」

やっぱり、コイツだけは好きにはなれない。そう、直感した。

1・あいつは恋愛対象外（後書き）

1話書いただけで葛藤中です。現在自分自身と戦ってます。

2・梅雨空模様のアタシ

「好きな人が欲しい」

そう。アタシだって恋くらいしたい。イイ人はたくさんいるといつても、恋にはなかなかつながらないものだ。

「えー、でもサナ、彼氏いるんじゃないの？」

「……いない。誰それ」

はあ、未だにカン違いしてる人がいるようだ。まったく、何ヶ月前に別れたと……いや、つい2週間前か。まだそう思ってる人がいてもおかしくない。

ぼーっとアユミを眺めていると、

「何？」

「今……女子ってほとんどが恋してるよね」

「そうなんじゃない？知らないけど」

やっぱり、してる人は恋してる。きつとアタシくらい、恋してないのなんて。

「はあ……」

ため息をつく、アユミに嫌な顔をされた。

「この梅雨にため息？ますますジメジメするっ」

外を見ると、雨がぱらついていた。梅雨、か。アタシにぴったりの時期……かも。

ダメだなあ、アタシ。

ぼーっとしたまま授業（地獄の数学）に突入したら、

「神谷、問い3の答えは？」

「……」

「神谷ー、問い3ー」

「…」

「神谷、おーい」

「…」

姓を呼ばれてるという事に気付いたのは、大分たってから…。

鬼教師、松田も呆れ顔だった。問い3の問題は、アタシの代わりに誰かが解いてくれたらしい。

「神谷、一体どうした？授業中に物思いにふけるとは、賢くないな
ア」

「はあ… スミマセン」

アタシは松田にこつてりしばられ、休み時間後にやっと解放された。数学ではうっかりしてらんない。

「しっかりしろ、自分」

アタシは自分に言い聞かせるようにつぶやいた。が、つぶやきもむなしく、次の理科の授業でも試験管を割るという大失態をしてしまった。しかも、3本一気に。

「ダメじゃん…」

アユミに言われた。分かってる。ダメな事くらい分かっている。たかが恋愛ごときでここまで悩んで、皆に迷惑かけて…。

「サナ？」

黙りこんだアタシを、アユミが心配そうに覗き込む。アユミを心配させちゃ、本当にダメになっちゃうよ…。アタシは顔を上げて、何でもないように振舞った。

「あははっ、ドジだよ、アタシ」

出来るだけの笑顔で笑う。でも、心は雨模様。

2・梅雨空模様のアタシ（後書き）

乙女心ってこんなでいいんだろっか？と思いつつある僕の小説を読んでくれた方々、感謝です！

3・乙女は恋に生きるべし

やっぱアレでしょ？恋愛の1番のお手本は、身近な人の恋でしょ？

「というワケで、アユミ、恋してマスかぁー」

アタシのいきなりの質問に、アユミは目をパチパチとさせた。

「…は？今度は何考えてんの、サナ」

「恋してマスかぁー」

「しつかりしてよ、サナ」

とうとうアユミに呆れ顔をされた。ちょっとしつこかったかな？

「アタシは大丈夫だよ。それよか、アタシ恋したいんだってば」

とにかくペースを戻そうとこう返すと、アユミはますます呆れ顔をした。

「昨日もそんな事言ってた」

「乙女は恋に生きる生き物だモン」

ちょっと可愛いフリ付きで言ってみる。

とにかく、昨日みたいにダメ人間にならないように精一杯恋したいのだ。

「へえー、サナみたいな女も恋するんだ」

「そりゃぁーそうだよ…って、ヒロ！」

いつからいたのやら、後ろにヒロが立っていた。

「お、乙女の神聖な恋話に入ってこないでよっ」

反論するアタシを無視して、ヒロは

「乙女は恋に生きる生き物だモン、だってサ…」

と、アタシの真似をしてからかう。

もう、だからヒロみたいな奴は嫌い…。

「サナって、女子の中で1番『恋』とか『愛』って言葉似合わねえよなー」

「うるっさいなあ。アタシだって一応女の子なんだからね。恋くら

い…って、そうだ。ヒロ、好きな人いる？」

「へ？何今の切り返し」

「アタシの恋の参考にさせてちょうだいな」

ヒロはにへらつと笑って、

「参考になんねえと思うけど？」

「いいよー。てか、いるの？」

「いるいる。すっげえ好きな子」

ふうん…もう好きな人が新しく出来たんだ…。いいな、立ち直り早くて。

「誰？クラスの女子？」

「それは言わない」

「ええーっ、それじゃ参考になんないよ」

周りからも、ブーイングが飛ぶ。ここまで来て言わないのは反則（何の反則だか知らないけれど）なのだ。

「だって…絶対俺嫌われてるし。叶わない恋を口に出すようなマネはしないぜ…ふっ」

「…ふっ、じゃない。すっごい気になる。めっちゃ気になる」

アタシが追求すると、ヒロはぱつと何かを思いついたように明るい表情を見せた。

「サナにも好きな人が出来たら教えてやる。その代わり、サナの好きな人も教える事…ってのはどう？」

「交換条件、て事？」

「そゆこと」

悪くないじゃないか。ヒロの好きな人も気になるし…。

「アタシ乗った」

「へっへー、早く好きな奴作れよ」

言われずとも、そうするつもり満々。

よおーし、今日からアタシの本気モードの恋をしてやろっじゃないの。

3 乙女は恋に生きるべし（後書き）

もうほとんど妄想です、心境なんかは。皆様、どんどんダメ出し
お願いします！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7130a/>

灰色空模様

2010年10月12日22時08分発行